明石の史跡（５７）松江寺の鐘

かつて広島市中区小町に所在する妙慶院（浄土宗）に、次のような銘文を持つ、鐘が存在したといわれる（広島市史社寺誌２１５－６頁）。

（五）

播州明石郡丑ケ庄ノ内林崎郷浜御瀧御宝前撞鐘也

右奉鋳処如斯　宝徳元己巳年十一月晦日

大檀那惣庄氏人等　大工次郎左衛門尉

別当　阿闍梨了玄

敬白

神主　藤原直吉

宝徳元年（１４４９）１１月晦日に、五箇庄（ごかのしょう）林崎郷の氏人たちが大檀那（布施物を多く喜捨する檀家。寺の檀家の内で有力なもの。＝広辞苑）となって、浜御瀧御宝前に撞鐘を奉納したものである。宝前（神仏の御前。＝広辞苑）に鐘を奉納するというのは、何らかの理由により消滅したからにほかならない。

この７か月前の宝徳元年４月１２日、山城大地震が発生。社寺に大きな被害をあたえている（史料綜覧８．３頁）。マグニチュードは５3/4～６・５という（平成１６年版『理科年表』７０４頁）。建造物が破壊されたならば、釣鐘は地面に落下するだろう。鋳造したのは、完全に損なわれたからに他ならない。したがって、この地震の可能性は弱い。

奉納の対象となった林崎郷の浜御瀧とは、いかなる寺院なのか。『明石記』（近世中期）の東松江村の観音堂の項に明石郡三十三所の第四番として、御滝山松江寺（みたきさんしょうごじ＝現在は正護寺・真言宗）の名が見え、「ふたらくとおなし流れの御瀧山ねかひをこゝにむすひとゝめよ」と、本尊（十一面観音）の賛仏歌が記されていることからも、中世においては松江寺と呼称されていたことが理解できる。（次項につづく）

正護寺

日本歴史学会会員 茨木 一成